

書評

Rita Charon 著

斎藤清二, 岸本寛史, 宮田靖志, 山本和利 訳

ナラティブ・メディスン
物語能力が医療を変える

東京武蔵野病院副院長・精神医学

江口重幸

臨床の前線で日々働く医療者にとって、医療と文学を結びつける発想や、病いや苦悩は語りであるとする言説などは、およそ悠長で傍観者の見解と思われるかもしれない。臨床場面は死や不慮の事故などのハードな現実と皮接しているからだ。実際そのような感想を面と向かって言われたことも何度かある。しかし、例えば狭義の医学的な枠組みから外れた慢性的病いを抱えて毎日やりくりしながら生活する患者や家族、あるいは彼らを支えケアする人たちを考えていただきたい。彼らが科学的な根拠のみを「糧」にしているのではないのは明らかであろう。病いを抱えながら、苦悩や生きにくさを日々の生きる力に変換していく根源の部分で「物語」が大きな役割を果たしているのである。

患者や家族の経験にさらに近づくために、こうした「語り」に注目したアプローチが医療やケア領域に本格的に現れるようになったのは、1980年代からである。本書はその最前線からもたらされた最良の贈り物である。医師でもあ

り文学者でもある著者のリタ・シャロンは、さまざまな文学作品や人文科学の概念を駆使しながら「物語能力 (narrative competence)」の重要性を説く。それは医療者が患者に適切に説明したり、事例検討の場で上手にプレゼンしたりする能力のことではない。病いや苦しみや医療にはそれらがストーリー化されているという本性があり、その部分にどれだけ注意を払い、正確に把握し、具体的に対処できるかという能力のことである。それに向けて著者が長年心を砕き、文学作品や「パレルチャート」を含む多様な臨床教材を使用しながら医学教育の場でも教えてきた成果のすべてが、惜しげもなくここに示されている。

物語＝語り (narrative) は分断された医療を架橋する (第2章)。そして医療は物語的特徴であふれていて (第3章)、医療者―患者関係を良好にするのみならず、苦悩の証人となり (第9章) その根底の倫理的な部分 (第10章) にも深くかかわってくるのである。

今日の医療の現状は、患者を中心とするものからはるかに遠く、徹底した生物医学に貧しい医療制度が絡み付いたものであるという指摘が常套句のごとくなされてきた。「患者や家族の声に耳を傾けなさい」という勧めも後を絶たない。しかし、こうした部分の根幹を変える力は、善意に満ちた心掛けや名人芸的な対話技術というより、それを支える方法論によってもたらされるものなのではないか。それが著者の言う「物語能力」、つまり物語＝語りを適切に扱うことができる理論的＝実践的能力なのであろう。

原著は2006年に刊行された。それから5年を数えるが、本書以上の関連書が現れる予兆はいまのところない。本書は医学的物語論のいわばK点を刻むものなのである。原著より小ぶりな体裁ながら、美しい装丁をそのまま生かし、しかも詳細な文献を含む全訳が盛り込まれている。邦訳も日本において narrative-based medicine を長らく牽引してきたベストの翻訳陣によって担われている。本書は医療やケアの重みや広がり、それにかかわる者の困難のみならず勇気や喜びをしっかりとわれわれに示してくれる、この領域への最良の導きの書である。

〔A5 頁400 2011年 定価
3,675円 (本体3,500円+税5%)
医学書院刊〕